

■ 公開講演会

In the Name of Justice



“正義”の名のもとで
—死刑制度を問いなおす—

Sister Helen Prejean

米国ルイジアナ州生まれ。57年からメダイユ聖ヨゼフ修道会に所属。米国での死刑制度の実際を描いた問題作『デッドマン・ウォーキング』の著者。ティム・ロビンス監督、ショーン・ペン、スーザン・サランドン主演で映画化もされ、話題を呼んだ。現在も定期的に死刑囚を牢獄に訪ね、講演会や執筆活動を通して、広く一般に死刑制度の見直しを求める活動を続けている。同時に被害者の家族のためのサポートグループの組織化をすすめるなど、その活動は総括的で多岐に渡る。

司 会：

公開講演会南山大学人間関係研修センターの公開講演会「In the Name of Justice」“正義”の名のもとで—死刑制度を問いなおす—ということで、今晚『Dead Man Walking』の著者として知られておりますSister Helen Prejeanをお迎えしております。

まず、講演に先立ちまして、私どもの人間関係研究センター長であります丸山教授の方からお話をいただきたいと思っております。よろしくお願いたします。

丸 山：

こんにちは。本日はお忙しいなか、南山大学人間関係研究センターの公開講演会においでいただきまして誠にありがとうございます。

本日は、Sister Helen Prejeanをお迎えいたしまして、死刑制度についてのお話、これは当然の事ながら死刑に反対する立場からのものということになるわけですが、お話しさせていただきます。

シスターはアメリカのルイジアナ州生まれでございます、1957年からSt. Joseph of daille修道会に所属して、世界を股に掛けて活躍していらっしゃるところでございます。先程も話にありましたように『Dead Man Walking』の著者として非常に有名でございますし、また新たに著作活動をされているということです。

実は、私自身は刑法の教師でありまして、死刑問題に全く縁がないわけではございません。ただ、日本の刑法での議論ということになりますと、犯罪者に対する社会的な非難ということで、まさに正義の名のもとに死刑というものが執行されるということです。それを、果たしてそのような形で認めてよろしいのかということ、改めて問いなおすという点では、本日のお話は非常にチャ

レンジングであろうと思っております。

それから、日本の死刑廃止論の方もそうなのですが、時としてやはり被害者というものを忘れがちであるわけです。しかし、シスターの場合、被害者のケアあるいはサポートというところに非常に力を注いでおられるという点でも特異な存在であろうかと思っております。

では、シスターからお話をいただく前に、シスターが来日された経緯について簡単にお話しいただきましてから、シスターのお話に入りたいと思います。

では、本日はごゆっくりといたしましょうか、活発な議論が出来ればと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

司 会：

それでは、皆さん、シスター・ヘレンのお話に入ります前に、今回の来日を可能にさせていただきました、こちらにお写真があります古川さんですけれども、福岡事件という事件が1947年にございました。そちらで冤罪で亡くなられた、お名前は申し上げられないのですけれども、その方の再審をめぐって今キャンペーンを一生懸命頑張っているらしいです古川さんの方から、今回のシスター・ヘレンの来日の件と、その福岡事件に関わるお話をいただければと思います。よろしくお願いいたします。^{*1}

古 川：

省略

司 会：

ありがとうございました。

そうしましたら、今日の本題、シスター・ヘレンの方からいよいよお話をいただきたいと思います。

通訳にクマイ恭子さんをお願いしております。昨年いらした時も非常にスムーズな通訳をお願いできたので、今回も非常に頼りにしております。心強い通訳をいただいて、皆さんの実りあるお話、ディスカッションになっていけばと思います。それでは、よろしくお願いいたします。

シスター・ヘレン：

皆さん、こんばんは。本日は、私の講演を聴きにきてくださりまして、どうもありがとうございます。

皆さんの目の前にいらっしゃる、古川さん（写真）ですけれども、この方が実は私が今回日本に参りました理由なのです。彼とアメリカで会いました時に、



^{*1} 編者注) 古川泰龍氏は1947年に起きた福岡事件の死刑囚の冤罪を晴らすため、2000年80歳で入獄されるまで、40年に渡る再審運動を行なわれた。シスター・ヘレンとは1998年ルーマニアで行なわれた第12回世界宗教者会議で、死刑廃止のパネリストとして出会う。シスター・ヘレンは泰龍氏の遺志を継いで活動を続ける古川龍樹氏、さゆり氏と共に、福岡事件再審運動、死刑廃止推進キャンペーンのため、2002年来日。

お話を聞きまして、まるで日本版マーチン・ルーサー・キング牧師のようだと感じました。

そして、本日の講演のタイトルですが、「“正義”の名のもとに」この点について皆さんと議論を深めていきたいと思っております。なぜかといいますと、社会というものが暴力を正当化することによって、「正義の名もとの暴力」が私たちに必要なものだというタテマエで裁判を行っているからなんです。

また、なぜ私たちが社会に住んでいくのに暴力というものが抑止として必要なのか、この辺りの裏にあるものを探っていきたいと思っています。暴力による抑止は、私たちに本当に必要なものなのでしょうか。これまで私はこのような場で死刑ということについて、話しをする機会を得てきました。本日はそのような経験を皆さんと共有し、話し合いたいと思っております。

私は、死刑というものは、社会がどんな時にでも使用したがる一種のパラダイムでないかと思います。社会はこのようなやり方をとります。まず敵を設定します。そして、「この敵が社会にいと危険だ」「我々の敵である、だから、彼の人権をまず剥奪しよう」と言って、その人の人権を奪ってしまいます。つまり、「この人物は危険だから人間ではない」と考えることによって、「じゃあ、私たちは、この人物をターゲットとして抹消してしまってもいいだろう」と、そういう理由付けをして死刑が行われているのです。

また、同じ例を更に発展させて、9月11日に起こりましたテロ事件、この件についても触れていきたいと思っております。この時の攻撃で、世界貿易センターの中にいたおよそ三千人の命が亡くなりました。そして、テロ事件の後で政治家たちが使ったレトリックというのは、まさに死刑が社会でまかり通っているレトリックと同じです。「ウサマ・ビンラディンが生きていようと死んでいようと我々は彼を捕まえないといけない。」

私は、これまでアメリカの死刑囚5人と関わってまいりました。3人が電気椅子で刑に処せられ、2人は注射によって刑に処せられました。

昨年、こちらに伺いました時は、死刑に関わる私自身の人生の旅で、『Dead Man Walking』について、そしてその時私が最初に立ち会った死刑囚ソニアについてのお話をここでさせていただきます。この件につきまして、今ここでもう一度簡単にですが、皆さんにお話しさせていただきます。といいますのも、これこそが今の私の行動につながる核となるものだからです。

過去に何が起こったかということが問題なのではありませんが、とにかく何か変化が起こると、私たちの人生は全く違う方向へと回っていきます。古川さんは非常に率直な教戒師でいらっしゃいました。彼は日本の死刑囚2人のために泣いていらっしゃいました。古川さんは、この2人の罪は冤罪である、彼らの無実を叫び、無実の者が葬られてはいけないと15年間叫び続けてきました。

驚くべきことに古川さんには5人のお子さまと奥様がいらっしゃいますが、その全員の方々がその会の運動に関わるようになりました。そして、長い期間、共にたたかっていらっしゃいました。このことが、今私がここに立っている理由なのです。

私の友人で、死刑囚棟で働いている者がおりました。彼からパトリック・ソニアについて、ある時、申し出がありました。死刑囚と文通をしてみないかというのです。その手紙の話をきき、死刑囚と第一回目に手紙をやり取りしたのは、1982年のことでした。1960年代からその時まで、ルイジアナ州でも全米でも、死刑執行された者は1人もいませんでした。ですから、私は、ただこのソニアという人に、まあ、手紙を書けばいいだろうと、それくらいの気持ちだったのです。ですから、「死刑囚に対して手紙を書きゃいいのね」程度に思っていたわけなんですけれども、この死刑囚との出会いというものが、実は人間との出会いだったのです。

私は1982年から手紙を書き始めました。そして分かったことは、ソニアは1人ぼっちだということでした。また、誰も彼を助けにきてくれなかったということでした。ですから、私が彼のところへの慰問に行くことになったのです。

『Dead Man Walking』を書くまで、私は1冊の本も出版したことはありませんでした。その本を、私は一人称の現在形で綴りました。そうすることによって、私がまるであたかもその時に経験しているような、そういう書き方をしたのです。そうすることによって、読者の方がその世界を実際に経験していただくことが出来るように考えたのです。

その当初、私は法律について、また死刑ということについて何も疑っていませんでした。私は、アメリカという国に誇りを抱いていたのです。正義が行われる国だと。特に、裁判で死刑を確定するかどうかということには、様々な立場にたったあらゆる情報が必要です。裁判は公正なものであるように十分考慮されるべきなんです。

最初にソニアを訪問した時、私は、これで初めて死刑囚と顔と顔を突き合わせることになるのだと、非常に緊張していました。そして、怖いと感じました。もちろん彼は手紙を非常にいい感じで書いてくれたのですが、でも私はこれまでに死刑囚に会ったことがないし、彼は実際に人を殺して、私はそういう人と話したこともなかったのです。それに、監獄に入れられている人ということは、その人間は非常に危険な人間だというようなイメージは、当然湧いてきます。けれども私は彼と2時間にわたって話をしました。

私とソニアが初めて会った時、彼は守衛に支えられて、まず腰をベルトでくくられていました。そして、手と足には鎖。その鎖を引きずるような形で彼は部屋に入ってきました。そして、彼の顔を見た時に、非常に驚きました。すぐ分かりました。とても人間的な顔をしていたのです。信じられないくらい、人

間味にあふれた顔でした。

話していくうちに分かったことなのですが、ソニアにはエディという兄弟がいました。ただ、エディは死刑ではなく、無期懲役だったのです。その時に私は、法制度というものに対して疑問が湧いてきました。なぜなら、エディがやったことはソニアと同じ犯罪です。同じ犯罪なのに1人は死刑、もう1人は生きながらえる。いったいこれはどういうことだと思ったわけです。

ですから、私は、エディも一緒に訪問しようと決めました。それは、車で2時間半の道のりではありましたが、私はその当時、ソニアだけではなくエディの方にも会いに行っていたのです。

初めは、この兄弟の犯罪がどういったものかは何も知りませんでした。すぐにそれについて陰影が見えてきました。様々な新聞を調べていくうちに、2人が犯したことが分かってきました。それは非常に酷いものでした。

新聞の第1面に、まず、とてもすてきなティーンエイジャー達の写真が載っていました。17才の少年、デイヴィッド・ロブ・ロウ。そして、ルブランという姓の、18才の若い女性、この人の写真でした。

この写真では2人とも微笑んでいました。学校のダンスパーティーの様子を撮った写真でしたが、2人とも素敵な服装をしていました。ですが、見出しに書いてあったのは「ティーンエイジャーが殺された」というものだったんです。そして、この事件の詳細が書かれていました。いかに酷いことをこのエディとソニアが行ったかが事細かに書かれていました。

この若い2人は、まず、ルイジアナの野原、ほとんど人が来ないところに車を停めに行ったのです。そして、エディとソニアはその日、1977年11月4日でしたが、うさぎ狩りに同じ所に出掛けていました。ライフルを持っていたんです。

そして、彼らは、車の中にいるこの若い2人に声をかけました。「私たちはここで守衛をしている警備員だけれども、最近若者が進入禁止の私有地にも入って来るので、そのチェックをしているんだ。車から出ていっしょい」と、このように話し掛けました。もちろん、これは嘘です。ですが、彼らは「君たちは進入禁止のところに入ってきたんだよ。両親に報告しないでおいてあげてもいいけれど、だったら、僕たちとセックスをしてくれなきゃね」と、こんなふうに言いました。

彼らは銃を持っていました。デイビッドと彼女は2人きりでしたし、非常に怯えていました。そして、その女性はレイプされてしまったのです。

それだけではありませんでした。更に悪いことに、2人はうつ伏せで、頭を撃ち抜かれる格好で死んでいたのです……。その格好で見つかったのです。ですから、新聞の見出しには「ティーンエイジャーが殺された」というふうに書かれたのですね。

最初に読んだ時に湧き起こってきた感情は怒りでした。普通の人間として、きっちりとした教養を持った人間として言うことなのですが、無実の女性が、しかもこんなに若い人たちが殺されるなんて。そういう怒り。人間的にも感情的にも私の心の中には怒りが湧いてきました。

いかなる人間も、このような暴力に遭ってはならないと思います。この若い2人はこれから成長するところだったのに、そのチャンスをかなえることもなく命を奪われてしまったのです。そして、その命を奪ってしまった、まさにその2人を私は訪問していたわけです。

これが死刑ということを非常に難しい問題にしている、まさに核心的部分です。というのは、このような犯罪を見ると、私たちの中には当然怒りが湧いてくるからです。無実の人がこんなひどい目にあったことに対する怒りです。

この出来事を読んでいくうちに、私の心に、まず最初に浮かんできたのは、被害者のご両親のことでした。ご両親にとっては悪夢だったと思います。金曜日の夜に子どもがデートに行ったきり、家に帰って来ない。

この犯罪を知って以来、私の魂はずっと緊張し続けたままです。この2人に対する、また、犯罪に対する怒り。そしてソニアは死刑に処されてしまったわけですが、死刑というものに対する怒りです。

そして、もう一方、忘れてはいけない人たちがいます。それは被害者のご両親です。子どもを殺されたご両親です。

若い少女の方のご両親は、私に対して非常にお怒りになりました。私と話をしようともしてくれませんでした。ですから、彼らとは人間関係を構築することができませんでした。少年の方のご両親に会った時も、私は次のように思っていました。「絶対に非常に怒っていらして、話してくださらないだろうな」と。

「全ての被害者のご家族の方は死刑を支持しています。」これは検察官の言った言葉です。この言葉は、正義の名のもとに、まさに正義の名のもとに、「これは被害者の両親が求めていることなのだ。だから、死刑にしないとイケないのだ」と言っているのです。

ところが、あの少年、デイヴィッドのご両親は、まず私にこう言いました。「シスター、あなたはいったいどこに行っていたのですか。あなたがパトリック・ソニア、それからエディ、この2人に会っている間、私たちがいったいどれほどの多くのストレスのもとに曝されていたかお分かりになりますか。いったいどこに行ったらしたのですか」と。私は非常に驚きました。だって、彼らの息子さんが殺されたのです。社会も「死刑にするべきだ、正義の名のもとに死刑執行すべきだ」と声高に叫んでいました。それなのに、彼らが私に言った言葉は、「シスター、いったいどこにいらしていたのですか」という一言だっ

たのですから。

それ以来、私は少年のお父さんの方も訪問し始めました。彼は、いつもチャペルでお祈りをしていたのですが、私も一緒にそのお祈りに加わりました。彼は私が初めて出会った犠牲者の家族であり、被害者の家族であり、また、暴力なしで罪に対して立ち向かっていこうという考え方を持っている初めての人もありました。

私は16年間、このような形で様々な被害者のご家族と会って来たのですが、出発点はいつもこのようなものです。愛する者が殺されるというつらさを背負わせる側に、まず彼ら（被害者側）が言うことは、「今度は復讐するのだ」。ですが私は、この旅を続けていくうちに、被害者のご家族のもっと深い部分にも触れるようになってきました。

もちろん、家族の方は最初は怒ります。この怒りとは生活を進めていく上で必要なものでもあるのです。何か犯人に対して復讐をするのだという、そういう怒りなしでは彼らはおそらく倒れてしまうか、惨い場合には自死してしまわれるかも知れません。

けれども、この父親が私に言ったのは次のようなことでした。悲しみを取り除く方法についてですが、「私はこういうことが分かりました」と彼は言いました。「もし、私が犯人を憎み続けていたら、それは私の心の中を蝕んで、私の心を殺してしまうだろう」と。

彼は続けて、「私には妻もいるし、孫もいる。彼らは私のことを必要としている。彼らのために私は生きなければいけないし、そのような状況で憎しみ続けていたら、私は本当に心の中から荒廃、崩壊してしまうだろう」と、彼は私に話しました。

『Dead Man Walking』では触れませんでしたでしたが、他の被害者のご家族にも会っています。彼とは全く違ったことを仰る家族も、当然あります。

あるご家族は、娘さんが殺されたので、その犯人が処刑されるのを見るのを待ちきれないという方もいらっしゃいました。死刑執行前に記者会見で、「彼が死ぬのを見るのが待ちきれないよ」と、そんなことまでおっしゃったのです。

アメリカでは政治家が次のような言葉を作り出します。「死刑は社会の正義のために必要である。そして、被害者の家庭に報いるために必要である」。これは、死刑を正当化する文言でもあるのです。

アメリカは50の州がありますが、その内の38州がまだ死刑制度を保っています。そして、その中には被害者の家族が死刑執行の時に一番前の席に座って、犯罪者が処刑される様子を見ることを許可している所もあります。

先程申し上げました、「その死刑囚が処刑されるのを待ちきれない」といった方を、死刑執行後にマスコミの人々が待っていました。この2人と死刑囚のことは全米の注目の的となっていたのです。

報道陣は、このように聞きました。「今、どのようなお気持ちですか。お嬢さんを殺されて、その犯人がとうとう死刑に処された。それをご覧になって、どのようなお気持ちですか」と。父親の方がマイクを握ってこう言いました。「とうとうやってやった。だけど、残念だった、彼は早く死に過ぎた。もっと苦しんで焼け焦げになるのが見たかった。」

その時に彼の話を聞いて私は思いました。いくら何十時間という時間をかけて死刑執行されるのを見たとしても、家に帰った時にドアを開けて椅子を見たとき、そこに娘はもう座っていない。彼の心は暗いままだということです。

人権について考えますと、命というものは個々にそれぞれ固有のものであって、たとえそれがどんなものであっても、絶対に他の何ものとも置き換えることはできないのです。私の国（アメリカ）では22年間死刑という制度が続いています。今、多くの被害者のご家族は、次のような認識を持ち始めています。「たとえ死刑が執行されたとしても、それは私たちの心を癒さないのだ。」

以前オクラホマの爆弾事件がありました。その時、ジュリーという娘が殺されたレーシーという家の方がいらっしゃいました。娘さんが殺されてから2ヶ月の間、どのような生活だったかをレーシーさんは教えてくれました。「タバコを毎日5箱吸って、お酒もたくさん吞んで、寝てばかりいた。そして、いつも怒ってばかりいた」。彼はこのように述懐しました。

ですが、閃きの瞬間が彼のところにもやって来たのです。ある日、車の中でラジオのスイッチをオンにしました。その時、彼は思い出したのです。娘と一緒に車に乗ってラジオを聞いていた時に、そのラジオから流れてきたニュースのことを。……それは死刑についてのニュースだったのでした。その時にジュリーが言ったことを彼は思い出しました。「パパ、死刑なんて復讐以外の何物でもないわよね。私は死刑なんて嫌だわ。パパはどう思う」そして、彼はこう思いました。「娘の記憶として、娘の名誉のためにも死刑なんて求めてはいけない。彼女も死刑を喜ばないだろうから。」

ここで、大きな疑問が起こってきます。検察官は、いつも「正義の名のもとに、人を殺した者は殺さなければならない。なぜなら、それは被害者の家族のためであり、被害者のためだから」と言っています。

まず、皆さん、ここで先に申し上げておきたいのですが、私はそれまで、このような凶悪な犯罪ですとか、こんなに大きな人々の悲しみ、こんな大きな損失感、喪失感などに人々が直面していることを知らずにいました。私は自問自答を始めました。被害者にとっての慰めというのはいったいどんなことであろうか、と。やがて、私は支援グループの活動を始めました。

私は、家族が殺されたという経験をしたことはありません。ですが、その支援グループに出向いて行って、彼らの苦しみ、喪失感を目のあたりにしました。彼らはたとえどんなに苦しい状況にあっても、生活を続けていかなければなら

ないのです。そして混乱。

また、私は驚きました。これは被害者の家族の多くの方が経験していたことなのですから、事件があった後、人々はその人たちのところから離れていってしまうのです。「あんなにも酷い事件だったから、どうやって私たちに接したらいいか人々は分からない。だから、私たち（被害者の家族）はいつも孤独なのです」と。

私は、最初に簡単な行動を起こしました。アメリカのニューオーリンズで被害者の家族支援のグループを作りました。そこに同じような境遇の人々が集まってくるまで、経験を分かち合い、慰めあう。将来のためにも誰かが一緒にいてくれるのだと感じられるように。そこが出発点でした。

その一方で、ソニアとの文通も続けていました。ある時、彼は私に電話をしてきました。「死刑の日が決まった」と。それは、私が彼を訪問し始めてから2年半後のことでした。死刑執行の日は、1994年4月5日深夜と決まりました。

私は信じられない思いがしました。これまでに、確かに人が死んでいくのを見たことがあります。そういった方々は病気だったり、病院に入院している方で、徐々に身体が機能しなくなっていって、そして亡くなっていく、そういう感じでした。ですが、ソニアの場合は生きていて、健常なのです。彼は部屋の中にずっと閉じ込められていて、突然命が奪われてしまう。そんなことは信じられませんでした。

私はソニアのことを人間として知るようになっていたのです。もちろん、中にはこのように聞く人もいました。「あんな酷いことをした人のもとを訪れるなんて大丈夫？」

2年半後、彼は聖書を読み始め、ずっと独房の中でそれを読み続けていました。そして後悔の気持ちや、自分のしてしまったことを悔やむ気持ち、こういった様々な思いが彼の心の中に湧き起こってきました。

でも、社会に死刑という制度がある限り、犯人がいかに道徳的に後悔しても、犯人の心の持ち方が変わっても、何の意味もありません。なぜなら、「被害者のために」死刑を行なっている限りは、死刑囚は、家族に対して「ごめんなさい」と言うこともできないし、どれだけ悔やんでも悔やみきれない、そういった気持ちを表現することもできないからです。

私はこのような場面に立ち会うたびに、いつもものすごい緊張感に板挟みにされたようになります。まず、一方では両親に対して被害者同士と同じように、口にするのも恐ろしい犯罪を起こした犯罪者に対するの怒り。そして、もう一方では犯罪者の人間性に対する思い。なぜなら、彼が犯したこのたったひとつの罪以上のものが、人の命にはあるからなのです。

ある守衛がこのように私に言ってくれました。日常的に、守衛の人は死刑囚の変化を見ているのですが、ある死刑執行の直前に彼は言いました。「今夜、

死刑に処せられようとしている人は、10年前に来た時の若い傲慢な人間とは全く違う。」

社会は、この「正義」の名のもとにおいて、「人を殺した人間だから殺さなければいけない」と言います。この考えが罷り通っている時に、私たちが考えなければいけないのは、ここに道徳上の大きな問題が含まれているということです。

まず、守衛の立場に自分を置き換えて考えてみる必要があると思います。例えば、酷い殺人事件が起こった。そして、社会が死刑を求めている。その時に、私は正義の名のもとに死刑執行できるのだろうかと自問自答してみる必要があると思います。実際に死刑囚の後ろに立って、私がこの死刑執行のボタンを押すことが本当にできるのだろうか、と。

もちろんとてもできませんね。ですから、誰かボタンを代わりに押して殺してくれる人を雇わなければいけないのです。ということは、私たちの心の中のどこかでは、「そうだ、死刑はいい」と簡単に言えない何かがあるということなのです。それは、ここにいる私たち全員が考えるべきことだと思います。

私は、ある死刑囚と、死刑執行の3日前に面会する機会を得ました。私の目の前で彼は生き活きとしていて、自分の意識もしっかりしていて、コーヒーを飲んで、タバコを吸いながら、私と話をしました。

私はその時に非常に不可解な気持ちに包まれ、そして混乱しました。床を見るとタイルがピカピカに磨かれています。そして、棚の上ではコーヒーがポコポコと音を立てている。人々は働いている。その中でこの人間が死ぬ。しかも、その死の時はもう決まっています、時計が一刻一刻と刻んでいる。

私はそこの守衛さんたちの何人かに会っておりますが、ある若い守衛がこのように言いました。「死刑執行のときは私はそこに立っているんです。でも私はそこにいたくないのですよ。もちろんこれは仕事だからやらなければいけないし…。分かるでしょう。私には妻もいるし子供もいるし、働かないわけにはいかない。でもこういうシーンは見ていたくないのですよ」

その時私と面会した死刑囚は、私にこのように言いました。「私のために祈ってください。神さまが私の足を掴んでいてくれるように祈っててください。だけど、あなたは私の最期の時を見届けてはいけません。それはあなたの心に消えない傷を残すからです」

日本では、これはあり得ないことですね。というのも、死刑は秘密裏に執行されて、普通の人々の目の届かないところで行われるからです。ですから、死刑囚と距離を置かれている時は死刑を支持するのは非常に易しい。死刑を支持することはできやすいのだということを、私は認識し始めました。でも、個人としてその人々を知ってみると、もっとこのことについて深く知りたいという気持ちが起こってきます。

アメリカでも同じことです。政府が行っていることについて、政府はあまり人に言いたくない。だから、実際に死刑執行に関わるのは10人から12人の、「死刑がきちんと行われましたよ」と証明する人たちのみです。政府は多くの人には手伝ってほしくないのです。というのも、自分たちが何をしているか、人々に事の真相を知ってほしくないからです。

パトリック・ソニアの最期の時、私は彼に「私の顔を見るように」と言いました。そして最後の時、彼は私の顔を見ました。私の顔が、彼が最後に見た人間の顔だったと思います。

私は死刑執行の後でその部屋から出てきて、「この気持ちをどうしよう」と考えていました。深夜ですので、周りは真っ暗で、人々はみんな寝ています。

そして、私はこう考えてみました。死刑が何を意味するのか、それを知るたった1人の人間ではいたくない、と。

死刑そのものだけにとどまりません。他のこと、死刑にまつわる様々なこと、も。それは多くの人々が知らないことなのです。私はそう考えるようになってきました。

例えば、正義のために死刑をするのだという謳い文句があります。ですが、実際に死刑囚を選定する段階になって、選ばれるのはどういう理由からでしょうか。白人を殺した人々なのです。白人はなかなか死刑囚にはなりません。有色人種が殺された場合、多くは死刑判決にはなりません。

37種類の死刑に値する犯罪のリストがあるのですが、10人のうち8人はいつも白人を殺したというかどで死刑が確定されます。

有色人種の方が殺されてしまった場合なのですが、その時は、もう被害者の属性というものがおざなりにされているのです。アフリカ系であろうとメキシコ系であろうと、他の有色人種であろうと無関係に、彼らの死は見過ごされてしまうのです。

また、死刑が確定する人々の多くが貧しい人だということが分かりました。貧しい人々は高いお金を払って弁護士を雇えないため、弁護士に法を盾にして、自分に有利な証言をしてもらうことができないからです。

そして、もう1つ、私たちは非常に難しい問題を抱えています。アメリカの司法制度には、陪審制というものがあります。彼らが死刑か否かの判決を下します。

弁護人はこう言います。「彼らは普通の一般の人々、私たちやあなたの方にように普通の人々です。」そして、更に続けます。「この普通の人々を、この若い犯罪者が部屋に入ってきて撃つのですよ。それも撃つだけではありません。2人、いや3人、どんどん殺していく！ このひどい犯罪を見てください！」

陪審員たちはそういった様々な要因を目の前に突きつけられて、やがてその殺された人に対して同情の気持ちを持つようになっていくわけです。

今お話している件は、実際にアメリカで起こったことなのですが、この若い

少年、ロバートソンにはちょっと精神的な問題がありました。彼の両親は彼を精神病院に入れて助けたいと思っていたのです。というのも、その精神的な問題というのが暴力性を帯びるものだったからです。

ご両親は私に助けを求めました。もしロバートソンが強盗か何か凶悪な犯罪を起こしたら、精神病施設に収容されるだろうと、両親は思っていました。そして、ある時、ロバートソンがとうとう暴走しまして、最後には人間を殺してしまいました。そこで陪審員は彼を死刑にするかどうか決めなければならない局面に置かれたのです。

「正義の名のもとに」陪審員はどのような決定を下すべきでしょうか。陪審員のこれまでの慣習をどのように使って判断すべきなのでしょう。この若いロバートソンは、少年は、殺されて死ぬべきでしょうか。それとも、生きるべきでしょうか。

アメリカでは25年の死刑の歴史があります。その死刑の判断が十分吟味されたわけではないのです。知恵遅れの人でも死刑に処されているのです。実際に精神障害がある場合でもです。

アーカンソーの死刑囚が死刑を執行される前に、夕食のパイを一口残しておきました。それで彼は、「食べるからとっておいてね」と言っておいたのです。ですが、彼が帰ってくるまでに死刑が執行されてしまったのです。

人間は、人権を剥奪されるべきではないと思います。政府がある人物が生きるか死ぬか生殺与奪を決めるという時に、私たちは決して賢く、人の死の決定のプロセスをつくることなどできないのです。だから死刑は公正ではないし、正義ではないのです。

世界にはおよそ190ヶ国ほどあります。そのうちの111ヶ国がもう死刑を廃止しています。彼らは、こういった神話はもう信じていません。危ない人間を機能しなくさせることによって社会を作ろう、という考えはもう現代社会では通らないということを、死刑を廃止した国々は分かっているのです。そして、この動きを支えているのが、人権に対しての新しい考え方です。

1948年に出された世界人権宣言。死刑に関してはこの中の2つの条文が指針となるでしょう。

まず第3条では、「全ての人間は生きる権利を持っている」としています。これが意味しているのは「人は殺されてはならない」ということです。「ある人が自己防衛のために人を殺してしまった。でも、今、その人は囚人となって刑務所にいる。その囚人になっている人を更に殺すことによって国を守ることができる」。そのような理論は成り立つでしょうか。

また、第5条では、このように述べられています。「いかなる人間も、残酷な罰則、そして拷問の対象になってはならない」死刑は拷問に該当するのでしょうか。例えば、注射を使って死刑を執行する場合。死刑囚が寝ている間に注射

をする。そして、彼の心臓は止まってしまう。ルイジアナでは、実際に毒の注射をする前にアルコールを注射します。そうすることによって死を楽にしようとしています。

拷問の制度は次のように定義できると思います。何も身を守る術がない人に対して、心理的、あるいは心体的に攻撃を加えることだと。

死を与える手法がいかなるものであっても、誰も人の意志とか想像力を奪うことはできないのです。

例えば、私たちが、この中の誰でもですけれども、ある部屋へ入れられて睡眠薬を与られます。私たちは何も感じません。ただ時計を見守っています。そして、そのまま刻々と時が刻んでいく。でも実際に死ぬまでに、私たちは何回も死を経験するのです。私たちには想像力があるのですから。

死刑囚は、まさにこれと同じことを味わっているわけです。つまり、次は僕の番だといつも死刑囚は考えている。そして、守衛がある日やってきて、そして死刑の部屋に連れていきます。それで、「これは、ああ、起きなきゃ。いやいや、違う、違う。今まさに僕は夢を見ているのだ。でも、夢ではない。」…こんなふうに。

また、例えば、同じ囚人同士となって、隣の独房に入っている人で知り合って10年間たった。でも、その人が1日早く逝ってしまったとか。

私が今書いている本の中にジョゼフ・ウォーゼルという死刑囚が出てきますけれども、彼は自分よりも先に死刑にされていった20人の人々を目の当たりにしてきました。

また、ボビー・ウィリアムズ、これは次の私の本に出てくる人物で、彼も死刑囚だったのですが、死刑が執行されるまでに3回死刑執行の場に連れて行かれたのです。最初の2回はあと1時間というところで撤回されて自分の独房に戻される。そして、1ヵ月後の3回目にととうとう死刑が執行されてしまったのです。

日本では、このやり方がもっと残酷な形で行われています。日本では、いつ自分の死刑の番が来るかということ知らされないまま死刑囚は収容されています。ですから死刑囚は「もう今日は駄目だ」、「明日はもう駄目だ」というような気持ちで耐えていかなければいけないのです。

また、アメリカでは死刑について新しい動きが出てきています。新しい考え方が起こってきています。テレビや新聞を見ていると、無実で死刑を宣告されていた人、冤罪のケース、そういう人がどんどん出て来ている。そういう人たちが死刑囚監房から解放されてきている。

米国では、死刑囚の中には、死刑を執行された人もされない人もいます。死刑宣告を受けた700名以上のうち101人が無実の罪で死刑を宣告されていて、これが今問題になっています。

自由になったということは、上告の制度が上手く機能しているではないか。101人の無実の人がこうやって死刑囚監房から出てきている。アメリカの正義が上手く機能しているではないかと言う人もいるでしょう。これも一つの見方ではありますが…。

私は、この点について現在執筆中です。新しい本のタイトルは『Innocent Betrayal (裏切られた事実)』です。

それでは、その101人の人はどうして自由の身になったのでしょうか。それは多くの市民、そして、学生がその運動に参加していったからです。つまり、裁判で制度が上手く機能しているとか、上告の制度が上手くいっているとか、それが理由で101人が解放されたのではないのです。人々の力なのです。人々が原動力なのです。

もちろん、DNAの鑑定で証拠とすることがありますけれども、ただ、これが使われるのは4回のうち1回ぐらいと考えていいでしょう。なぜなら、生物学的に実証されていなければいけないですし、そのためには物証を入手する必要がありますから。

イリノイにアンソニーという人がいました。彼は死刑執行の2日前に自由の身となることができました。でも、無実を裁判所が認めたからではありません。彼の精神状態に疑問が持たれたからです。

別の例では、シカゴにありますノースウェスタン大学のジャーナリズム専攻の学生が、ある事実について調べるよう、彼の教授に呼びかけられたのです。犯罪の場面を調べるための調査員を雇って、いろいろ詳細に調べました。そうすると、実際にその人物が無実だということが分かったのですが、14年間獄中生活を暮らした後で死刑が執行されてしまいました。

なぜ無実の人がそのような形で命を落としていくのか、私は制度上の2つの理由があると思います。

まず理由の1つは、実際に死刑を宣告されるのは貧しい人たちということです。彼らは有名な弁護士を雇うお金がありませんし、証拠を集めるだけの十分な資源もありません。証人に対しての情報も限られています。ですから、裁判で陪審員は、自分たちが聞いたことを基に、有罪という判決を出してしまうわけです。

もう1つの理由として、一度有罪を確定した後で上訴に向けて働きかけたとします。しかし、ここで裁判所側が行うことというのは、元々の提出された証拠は見ないのです。その代わりに、憲法上の整合性ということ、込み入った部分だけを見て、そして、最後にゴム印をパンとついて終わりにするというわけです。

15年間、私はアメリカで人々に呼びかけてきました。そして、死刑制度廃止に向けて説得を続けてきました。

最も驚いたのは、そうやって私たちが会った人々は、彼らは単に知らないだけだったのです。そして、死刑について考えたこともなかったのです。

なぜなら、死刑執行については、往々にして一般の人には秘密にされています。ですから、こういった古川さんのような人、社会活動を行って全国中を足踏して、二人の無実の人―石田さんたち―のために歩いて回った。こういう人はなかなか出てこないわけです。

そういうことで、『Dead Man Walking』を最初に出版した時、それは1993年でしたが、ベストセラーでは全くありませんでした。死刑についての本ではありませんでしたが、そこそこ売れてはいましたが。ベストセラーでは全くなかったのです。

ランダムハウスの編集者が「最初の10ページの中で、ソニアの犯罪について書かれていなければ誰もこの本は読まないであろう」、このように助言をしてくれました。

この本の非常にいいところは、2つの立場から平等に書かれているということでした。被害者の家族側、そして、もう1つは犯罪者と犯罪者の家族側。この2つが上手く融合して、それが読者に訴えかけているのだと思います。

1994年、電話が鳴りました。それは、スーザン・サランドンからの電話だったのです。「今、メンフィスで映画撮影をやっているのだけれども」ということでした。

あるドイツの脚本家は、このようにおっしゃっていました。「まず、本を書くためには、情報というカリソースが大事なのだ。それが集まれば自然に本は成り立つでしょう」

スーザン・サランドンもベストを尽しました。そして、彼女はこう言ったのです。「これを映画にするべきです。そして、アメリカの人々に死刑をめぐる旅に参加していただくではありませんか」と。

彼女は既に監督のティム・ロビンズに本を送っていました。ですが、彼は非常に忙しかったので、6ヶ月間本は読まれないでいました。6ヶ月後にやっと本を読んでもらうことができたのです。そして、ティム・ロビンズが本を読んだ時にこう言いました。「ああ、これは是非やろう」と。

ハリウッドの映画配給会社はどこもこれを映画化しなかったんです。ですが、ティムは、「(ハリウッド映画が)できないようなものを作ってやろう」と。

ティムは『Dead Man Walking』の映画をハリウッド的なものに仕上げようと言ったわけなのですが、それに対して私はこう言いました。「それじゃあ、逆効果ですよ。それは、確かにそういうふうに、映画をハリウッド的に作ったら、観客は楽しむかも知れませんが、でも、それは娯楽であって、死刑について多少考える人には何の効果もないでしょう。死刑が扱われているの

ですよ、この話の中では。そして、彼は有罪になっているのですよ」と私は申し上げました。

そして、小さな映画配給会社、ポリグラム・フィルム・エンターテインメント、これが映画を撮った時にこの映画を取り上げてくれました。

この映画は反死刑を謳った映画ではありません。ただ、なぜ死刑がいけないのかという多くの理由を含め、暗示した映画です。しかし、これは、同時に芸術作品でもあります。というのも被害者側と犯罪者側という両者を扱っている。そして、見る人の深いレベルで考えを引き起こして、社会に、死刑という人を殺す権利を与えてしまうこと、社会にこのような力を与えてしまうことについて考えさせる映画なのです。

この中で、『Dead Man Walking』をご覧になった方は挙手をお願いいたします。

それでは、ご覧になってなくても結構ですので、『Dead Man Walking』について聞いたことがある方。

なぜだかご存じですか。というのも、4つの部門でアカデミー賞にノミネートされて、スーザン・サランドンもアカデミー賞をこれで取っているからです。

それで、その後いきなりこの映画は世界に出ていきました。世界各国で上映されて、本の売上げもニューヨークタイムスのベストセラーリストのトップになりました。しかも、8ヶ月間、31週にわたって。こんなことは今まで起こらなかったのですけれども、賞を取った途端にこうなったわけです。

その次がオペラ化でした。2000年、サンフランシスコで『Dead Man Walking』のオペラが上演されました。

なぜだかお分かりになりますか。こんなにも受け入れられた理由がお分かりになりますか？それは、この作品が人間の命の、生命の深いところを扱っているからなのです。生と死、愛と憎しみ、そして、(キリスト教的意味での) 憐れみと思いやり。そういったものが死刑囚の目を通して描かれているからです。

オペラの場合ですと、プロローグのところで2人の殺人のシーンがまず演じられます。観客はどのようにこの2人が殺されるのかを目の当たりにします。ですから観客が最初に感じるのは怒りです。

そして、観客はこの旅に出掛けるのですが、まず始まりの部分でこのシーンを見ました。そして、次に犯罪者の顔を見ます。彼らはこのように言うわけです。非常に傲慢で、悔恨の念が全くないような、そんな犯罪者の顔を見て「もし誰かが死刑に値するのであれば彼である」そして、「彼が死ぬのを見ることを待つことができない」と観客は言うようになります。

次に観客の心の中に転機が訪れるのが今から申し上げる場面です。

5人の政府関係者の前で、犯罪者の母親が「どうぞ、私の息子を救ってやってください」と嘆願をします。

さて、ここで、非常に複雑な道徳的葛藤が観客の中に起こってきます。観客

が息を飲むのが聞こえてきます。

ここで行われようとしているのは、もうひとつの苦しみということなのです。また同じ悲しみを経験する家族があるのだということ、観客が気付き始めるからです。この人物を死刑にするということは、同じ苦しみをもうひとつの家族にも味わわせなければならないということなのだ気付くわけです。

このような非常に重要なプロセスが秘密裏に行われている社会で、それを日の下に出していく手段は芸術しかありません。本、オペラ、映画など。今、ティム・ロビンスはこれを劇化すること、舞台化することも考えています。

この印税は、彼の利益のために使われるものではなくありません。ティム・ロビンスは全米のコミュニティを回って、多くの人々がその問題について考えてくれるように身を捧げているのです。

それでは、話が終わる前にもう少しだけお話を続けさせてください。その後で質疑応答に入りたいと思います。

アメリカで起こったテロ事件についてです。これがもたらした違いとはいったい何でしょうか。

死刑についてのパラダイムということをお話しした時に、申し上げたと思います。軍隊でも同じようなことが言えると思うのですけれども、軍隊が社会の問題を解決しようとする時に、彼らはまず目標を設定します。そして、その目標物の人間性というものを剥奪しようとしています。

9月11日に起こったテロ事件。それは、私たちアメリカ人にとっては非常に貴重な情報を得ることになったと思います。

まず申し上げておきたいのですが、アメリカ本土で、戦争が行われたことはありません。

私は、今日、広島からこちらに来たのですけれども、広島では原爆のことを見てきました。しかし、アメリカの人々はそういうものを見ることはできません。ですから、戦争によってもたらされるものがいったい何かということが想像もできないんです。

無実の市民が殺された時に、社会に伴う付随的損害（軍事行動によって民間人が受ける人的及び物的被害）というふうに捉えます。

そして、9月11日、アメリカ人は、アメリカの国土で多くの人々が貿易センターで殺される様子を見ました。しかも、アメリカの飛行機によって。

この事件の後、ブッシュ大統領、そして、チェイニー副大統領のスピーチをお聞きになったかと思います。彼らが声をひとつにして発言したのは、「ウサマ・ビンラディンを捕まえないといけない。死んでいようが生きていようが、とにかく目標を設定して、彼の人間性を剥奪してしまうのだ」というメッセージでした。

その後でアフガニスタンに爆弾が投下されたわけなのですけれども、あんな

に高いところから爆弾が投下されたということはいったい何人の方がお亡くなりになったことでしょうか。しかも、アメリカ本土では誰もその爆弾で死んでいないというのに。

そして、テロリストに対しての、テロに対しての宣戦布告がなされたわけです。「悪の枢軸」というような言い方でブッシュ大統領が表現しましたがけれども、イラン、イラクが悪い、そしてアメリカはよい、ということです。善いと悪い、2つに分けてしまう。アメリカはその善であると。そして、次に目標となったのはサダム・フセインです。

ベトナム戦争は、アメリカが軍事力を持ってしても勝つことができないという経験を知った初めての戦争でした。今回のテロ戦争が、おそらく2回目のアメリカの軍事力の限界を思い知るものになるだろうと、私は思っています。

まず、私たち自身の弱さがあります。だいたいテロというものに対して、その攻撃に対して、どのようにして自分たちを守っていくべきなのでしょう。

チェイニー副大統領がアラブ諸国を回って帰ってきて、アラブ諸国にこう言われました。「パレスチナはいったいどうなのか」と。

アメリカは、イスラエルとの関係については十分注意を払ってきましたけれども、パレスチナのことに関してはあまり注意を払ってきませんでした。逆に、イスラエルから来たロビイストは非常に強力です。そのような力のある人たちが政治を動かす力を持っているのです。

9月11日以降、アメリカでは様々な講演会や談話が持たれました。イスラムとはいったい何だろう、イスラム教とは何だろう。いったい何がイスラム教で、何がこのような事件を起こして、そして、コーランとはいったい何なのだろうか。人々はこれらについて話し始めました。

アメリカは非常に強大な力を持っています。ですから、何かあった時に、まず本能的に頭に浮かぶのは、軍事力によって物事を解決していこうという考え方です。それがいつも最初に頭に浮かびますし、非常に根深い考え方になっています。

誤解していただきたいのですが、何もテロに対して受け身になれと申し上げているわけではありません。私たちがテロを撲滅するためには、まずテロリストのネットワークというものを理解して、彼らの資金がどこから流れてくるのか、そこを断ち切って彼らの行動ができないようにしなければならないと思います。

しかし、爆弾を落として人の命を奪うこと、それは本当に正しい抑止力なのでしょう。そして、テロリストを捕まえた挙げ句、そのテロリストを処罰する。それは正しいやり方でしょうか。

それでは、私の話はこの辺で一段落ということにいたしまして、皆さんからご質問、感想、コメント等がありましたら何でも結構ですので仰っていただき

たいと思います。

司 会：

これから質問を受けたいと思いますが、長いお話をしていただきましたヘレンさん、そして、クマイ恭子さんに拍手をお願いいたします。ご質問のある方は挙手をいただければマイクをお持ちします。

フロア：

どうもありがとうございました。先生がこの講演を通じて、人の命の尊さについて力を入れてお話しになったのはよく分かりました。

ただ、私が質問したいのは、それとは違います。極東軍事裁判のことです。「“正義”の名のもとで」ということが書いてありますが、東条さん以下7名の死刑囚は正義の名において殺されたのでしょうか。それとも、今のお話の内容からすると、若干やはり疑問に思うことがありますか。

シスター・ヘレン：

政治はそのような死刑判決を人々に課す時に非常に大きな意味を持ってきます。そして、世界で最高の圧力が高まっているような状況では、まず往々にして行われるのが最も目立つ人が特定されて、ある意味で処罰という感じです。

そして、死刑にされた人は、象徴的な意味で死刑にされるのだと思います。そのことに対してのみせしめというような感じで。

確かに、第二次世界大戦後に軍事裁判が行われて、死刑を執行された方がいるということを私も聞いています。しかし、今、興味深い動きが起こってきています。国際刑事裁判所。ここで起こっている動きは、個人の犯罪であれ集団の虐殺であれ、とにかく死刑は行わないというものです。

例えば、キッシンジャーがベトナム戦争の時代にアメリカがカンボジアに無数の爆弾を落としたこと、そういうことについては追及されませんでした。そして、キッシンジャーはそういうことを命令した人ですけれども、この点について裁判が成り立つことはなかったのです。このように、人によっては何も問われないということもあるわけです。

しかし、私たちがこの世で最も賢明な態度というのは、次のようなことではないでしょうか。傲慢な考え方をする前に、「私たちが、誰が殺されて誰が生き延びるか、そういうのを決める権利がある」ということについて社会（私たち）が考えてみるということです。

フロア：

問題は、東条さんが神様だということです。日本人は東条さんを神様とした。7人の人は神様です。ですから、それでちょっと先生にお伺いしたかった。

司 会：

ありがとうございました。

今、一応お話をこちらの方からいただきましたので、他の方からもご質問を

受け付けたいと思います。

他の方はいかがでしょうか。せつかくですので、あと二、三伺ってということになると思うのですけれども。

フロア：

(英語で) まず、お話を、どうもありがとうございました。あなたは、私の中のヒロインなんです。

最近、死刑に対して、法律の専門家の方が書いたもので、「死刑というものに懲りてきた」ということを彼は書いているんです。いくら最高裁で刑法が修正されたとしても、死刑というのは、おそらくもう効率的な手段ではないであろうとその法律の専門家は言っています。

では、死刑撤廃のために刑法を修正せずに、いったいどういう方法があるかということ、おそらく、無実の人が実際に死刑にされているという事実を示していく、それを見せていくことによって、死刑撤廃ということが可能になってくるのではないかと、その法律の専門家は書いていたんです。

それについてのご意見を伺いたいと思います。アメリカではどうなんですか。

シスター・ヘレン：

まず、基本的にあなたのおっしゃったとおりだと思います。

政治が、死刑というものを、燃料みたいな存在として扱っているわけですね。火に油を注いでいたり。こうすることによって死刑をどんどん正当化していくことになっていくのです。

例えば、ブッシュ大統領候補そしてゴア大統領候補が、舌戦を重ねていた時に、彼らは死刑制度についても言及していました。彼らは2人とも「死刑は支持する」、「犯罪に対する抑止力になるからだ」と言っていました。

けれども、他の人々、アメリカのほとんどの人々が、もう死刑というものは抑止力としては役に立たないということに気が始めています。例えば、アメリカでは38州が死刑という制度を持っておりますけれども、その州では、殺人やレイプの発生件数が他の州に比べて2倍の水準になっています。

ですから、無実の人が死刑になっていく、その様をどんどん示していく。確かにそうだと思います。それが政治家の考え方を換え、政治家に変化を起こす勢いづけみたいなものになると思います。

この非常にいい例が、保守派の共和党のイリノイ州知事ジョージ・ライアンだと思います。13人、冤罪で死刑が確定している死刑囚がいるわけですが、この13人はもう釈放されなければならないと、言っています。

2000年1月に、そのジョージ・ライアン知事がこのような声明を出しました。「この者たちに対して執行猶予を求める。その間に調査をして、しっかりと物証とかそういったものを確認した後でなければ、死刑は絶対行わない。だいたいイリノイという州においては死刑という制度をもう持っていたくない」と。

そして、昨年この声明に関してイニシアチブがとられ、19人の州議会議員が死刑囚に対して執行猶予を認めました。

また、アメリカ全体の調査によりますと、この25年間で死刑を支持する人の数は最低になっているということです。人々は死刑の効果に対して疑いを抱くようになってきたからです。

今まで申し上げてきたことが、私が現在執筆中の本を出版しようと思った最大の理由です。この本の中には2人の死刑囚、しかも無実で殺されてしまった人達が出てきます。

1人にいたっては、バージニア州で起こったことなんですけれども、その死刑執行の後でDNAの証拠が破壊されるという事態まで起こっています。本来であれば、DNAテストだって可能だったはずなのに。

ただ、この事については、私は、読者に実際に読んでいただいて、彼らが無実だったということを知っていただき、死刑廃止に向かう流れを起こす一原動力のようなものになればいいと願っております。

また、これが今回私が日本に、古川さんに会いに来た理由でもあります。

今、古川さんの意思を継ぐ人たちが、死後再審を求めて運動中です。実際に死刑に処された人々は、その犯罪の現場にも足を踏み入れてなかったのですから。

司 会：

ちょっと時間が押しているのですけれども、せっかくですので、もう一方だけご質問を受けて、終わりの方に向けていきたいと思います。いかがでしょうか。

フロア：

私は、今日の話聞いてとても勇気が出ました。なぜなら、9月11日のテロ事件以来ずっと私は1つのこと考えていました。

テロ事件が起こった時に、私はその映像を見てとても悲しかったし、怒りが沸いてきました。なぜこのようなことが起きたのか、本当に心の中で許せない気持ちが相当たくさんあって、憎しみが沸いてきました。

でも、その後、たくさんの権力者や、彼らがその事件の後でおこなった復讐とともとれる対応の仕方について、それを考えた時にもっと深い悲しみが私の中に現れました。

私は、こういう事件が起こるまで、このようなことが起こっていることを知らなかった。それが死刑のことであったり、今まで起きてきた戦争であったり、全て同じことだということに気づいた時に、このようなことが起きている社会を知らずに生きてきた自分にすごく引け目を感じました。

今日この話を聞いて、私は、死刑や、また、復讐でしか、その怒りや憎しみを静めることができないと思って過ごしている人々や、この社会をもう少し見詰め直して、新しい方法を探す希望のあることに気づいてとても嬉しかったで

す。ありがとうございました。

シスター・ヘレン：

どうもありがとうございます。まだまだ、あなたは若くていらっしゃるかもしれませんが、非常に賢明な方だと思います。そして既に、理解への道を歩み始めているんですね。お考えを分かち合ってください、どうもありがとうございました。

まず、行動を起こすことが大切です。勇気を持って多くの人々が、日本の司法当局に、書面で訴えることです。たとえば署名などをしていただきたいと思っています。それには市民全ての力が必要なのです。勇気が必要です。そして、みなさんの力に期待しています。

どうもありがとうございました。

司 会：

どうも長い時間になりました。ちょっと延長しまして、今8時40分になっております。本当にみなさんの真剣な拝聴、そして貴重なコメント、ありがとうございました。

また、人間関係研究センターは公開講座を開いておりますので、これからも情報発信していくと共に、また機会がありましたら、公開講演会の方も今後ともよろしく願いいたします。

今日は本当にありがとうございました。

(2002.5.24)

